

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第48輯

高向遺跡Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
試掘並びに発掘調査報告書

1990

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

た こう
高 向 遺 跡 II

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
試掘並びに発掘調査報告書

1990・1

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

河内長野市は、大阪府の東南部に位置し、自然と文化遺産に恵まれた所です。特に金剛寺・観心寺の二大名刹が早くから国の史跡・有形文化財に指定され、今に伝えられる多くの建造物・美術品・古文書などが顕彰されてきました。

緑多い丘陵地や田園地帯に良好に残されてきた埋蔵文化財は、高度経済成長期以後、京阪神経済圏のベッドタウン化による大規模開発に伴い、日々、その姿を現しつつあります。

近年の交通量の増加に対応する為、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（大阪外環状線）の建設が計画されました。これを契機として発見された遺跡の1つが高向遺跡で、関西国際空港のアクセス道路建設の具体化に伴い、調査も昭和61年度から実施してまいりました。

調査は、関係者の努力により大きな成果をあげることができ、報告書中に詳述してありますが、先土器時代から近世にいたる集落・生産地の実態を考える上で貴重な資料を提示することとなりました。

本遺跡の調査も4年目を迎え、今回はその追加地区の調査と言うべきもので、道路敷の小規模な調査と南に広がる丘陵部の試掘調査でした。

試掘調査では、埋蔵文化財の包蔵地の確認はできませんでしたが、地道な積み重ねが、文化財の保護・保存対策に必要な不可欠なものとする次第です。

最後に、本事業を進めるにあたって御指導・御協力を賜った大阪府土木部・大阪府富田林土木事務所・大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会・地元関係者各位に、深く感謝致しますと共に、今後とも当協会の事業に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年1月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈祐吉

例 言

1. 本書は、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線の新線（大阪外環状線）建設に伴う、河内長野市上原に所在する高向遺跡（その4）工区の発掘調査報告書である。
2. 高向遺跡（その1～その3）工区の報告書として、『高向遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第40輯 1989 を刊行している。本書はその続刊であり、重複するところは割愛している。上記『高向遺跡』を併せてご覧頂きたい。
3. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課の指示に基づいて、大阪府土木部富田林土木事務所の委託を受け、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
4. 調査は、調査課第1班技師 田中一廣が担当した。現地調査は、平成元年10月9日から準備工に着手し、11月6日より12月25日まで実施した。
5. 整理・報告書作成は、平成2年1月10日より31日まで田中が行った。
6. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課・大阪府土木部富田林土木事務所・河内長野市教育委員会・河内長野市立高向小学校および地元関係各位の協力を得た。
7. 現地調査及び整理作業にあたっては、大阪府教育委員会より阪田育功氏の御指導を受けた。また、大阪府文化財愛護推進委員澤田源太郎翁には、高向・上原地区の地籍・水利慣行について御教示を受けた。
8. 写真整理・焼付けは、資料班による。
9. 本書の実測・製図・執筆・編集は、田中が行った。尚、遺物・記録類は、資料班で保管している。

凡 例

1. 本書の文中・遺構実測図に用いた方位のNは、国土座標第VI系の座標北を示す。尚、真北方向へは東へ0°15'19"・磁北へは西へ6°30'の位置関係である。
2. 標高は、T.P.（東京湾標準潮位）で表示す。
3. 本調査における遺構実測図は、平面・断面とも、1/20もしくは1/40を作成した。
4. 本書に示した遺跡の地区割りは、新版大阪府地域計画図（1/2500）を基にした当協会の地区割り呼称と、現地の調査区名とを併用している。
5. 遺構記号・番号呼称はすべて協会独自の呼称方法をとる。
O○—土坑 O P—ピット O S—溝 O Z—水田 O L—池・沼 O X—その他
6. 本書で用いた色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』6版 1986 との比較による。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と経過	2
第II章 高向遺跡周辺の環境〈河内長野市関係文化財文献抄〉	3
第III章 調査の結果	6
第1節 A地区の調査	6
層序・検出遺構・出土遺物	6
第2節 B地区の調査	14
No.1～No.24トレンチ	14
第IV章 まとめ	20

挿図目次

第1図 高向遺跡位置図 (s:1/37500)	1
第2図 調査地位置と地区割り (s:1/5000)	3
第3図 A地区遺構全体図 (s:1/200)	7～8
第4図 A地区土層断面実測図 (s:1/80)	7～8
第5図 A地区出土遺物実測図 (s:1/4)	11
第6図 調査地地形とトレンチ配置図 (s:1/15000)	15～16
第7図 B地区トレンチ土層断面実測図 (s:縦1/60・横1/600)	17～18
第8図 周辺旧地形と水路図 (s:1/6000)	20

図版目次

図版一 調査地遠望 (遺跡・A地区)	図版七 B地区 (22'・3・21・20Tr.)
図版二 調査地全景 (B地区・A地区)	図版八 B地区 (19・4・18・17・16・5Tr.)
図版三 A地区 (全景・23-O L・24-O X)	図版九 B地区 (5・15・14・6・13Tr.)
図版四 A地区 (土層・2-O Z・23-O L他)	図版一〇 B地区 (12・7・11・8・9・10Tr.)
図版五 A地区 (土層・3-O Z・水路)	図版一一 A地区出土遺物 (1)
図版六 B地区 (1・2・23・22Tr.)	図版一二 A地区出土遺物 (2)

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経過 (第1図)

大阪府土木部は、高度経済成長期の交通量の増加に対応する為、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線のバイパス(大阪外環状線)を計画し、大阪府教育委員会との間で協議が繰り返された。路線内には、未発見の遺跡を含む可能性があることから、分布調査が実施されることとなり、財団法人大阪文化財センターに調査が委託された。高向遺跡は、その昭和48年度の埋蔵文化財分布調査により発見された11地点の遺跡の一つである。^(註1)

関西国際空港建設をひかえ、大阪外環状線は空港アクセス道路として工事が本格化し、空港関連事業として財団法人大阪府埋蔵文化財協会に調査が移管され、建設に先立ち1.1kmの予定地内を昭和62年1月から2月にかけて試掘調査を実施した。調査の結果、遺物包含層が検出され、府教育委員会の指導で府土木部との間に委託契約を交わし、道路建設に先立ち、昭和62・63年度に1次～3次の23000㎡にわたる全面調査を実施した。

それらの結果、弥生中期から近世までの遺構が検出されている。その他に包含層(I～III層)中から、先土器時代のナイフ形石器・縄紋草創期の有舌尖頭器をはじめ、全城より



第1図 高向遺跡位置図(s:1/37500)

縄紋から弥生時代のサヌカイト・チャート製の石鏃・削器・剝片類が多量に出土した。特にF区周辺では密度がかなり高い。大部分は北白川下層式並行期と位置づけられている。^(註2)
成果は、報告書『高向遺跡』に詳しい。

これらの成果を踏まえ、今回は、前回調査G区に接する丘陵裾部の未調査区の全面調査と、以南の丘陵部の試掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の方法と経過 (第2図)

過去3次にわたる調査では、北からA～Gの7つの調査地区を設定している。今回は、G区と水路・里道を挟んだ丘陵裾部の全面調査区をA地区(H区)・丘陵頂部の確認調査を行う試掘対象地区をB地区と仮称した。A地区についてはG区検出の集落の広がりを把握すること、B地区については遺跡・遺構の有無を確認することが目的である。

遺跡の位置・調査区内の地区割りを示すのに、国土座標第VI座標系を基軸に使用した当協会マニュアルに総て準拠している。具体的な調査の方法は、『高向遺跡』で触れているので省略する。

尚、今回の調査対象地は、地域計画図(地形図)の大D-5-4-1 15・20・25、J 11・16と大C-5-16-A 04・05・08・09に該当する。ちなみにA地区の100m交点での座標は、 $X = -173.8\text{km}$ ・ $Y = -41.5\text{km}$ 、緯度・経度では、 $B = 34^{\circ}25'56''$ ・ $L = 135^{\circ}32'54''$ である。

調査は、平成元年10月4日に高向遺跡(その4)工区として土工事請負業者と航空測量委託業者が発注され、9日からの準備工の後、現地調査は11月6日から伐開作業を手始めに開始し、A・B地区同時並行で進めた。掘削は、総て人力掘削により、12月25日に調査を終了した。整理作業と報告書作成を1月10日より31日まで延べ15日間で実施した。

註

- (1) 財団法人大阪文化財センター『主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス(大阪外環状線)予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』1973・3 その後、周知の遺跡として把握されることとなった。大阪府教育委員会文化財保護課『大阪府文化財分布図』1986・3によれば、遺跡は河内長野市高向の大字を中心に東西300m・南北750mの範囲がマークされている。
- (2) 西村 歩「高向遺跡の調査-石川上流域の縄文前期遺跡-」『第7回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』(財)大阪文化財センター 1989・11・26
- (3) 今回の調査対象地は総て河内長野市上原の地番に属している。A地区は上原46・47番にあたる。B地区は、1～50番である。

第II章 高向遺跡周辺の環境 (第1回)



第2図 調査地位置と地区割り (s:1/5000)

に若干補足したい。

中世を語る場合、二大名刹の金剛寺・観心寺を抜きにしては語れない。長野武者と称された源貞弘が地領としていた時期や、鎌倉後期には、高向に住まいしたその子孫の貞円が金剛寺領の荘官と称し悪党集団を率いていたことが金剛寺文書にみえる。また、南朝方の後醍醐天皇・後村上天皇・悪党出身の楠木正成一族などの攻防の舞台でもある。楠木配下にも高向氏の名が見られるなど、貞円に代表された高向周辺の武士団が彼らを支えたのであろう。宇丹保池周辺にカイト(垣内)の地名を見いだし、彼ら武士の館跡が埋没している可能性がある。一部検出された木棺墓・建物跡は、それらの集団とは無関係ではない。

高向遺跡は、大阪府の南東部に位置する河内長野市高向・上原に所在している。長野は、交通の要衝で、河泉街道・東西の高野街道・五條街道により河内・堺・大阪並びに京・大和・紀伊に通じる。

遺跡は、大和川水系の支流、石川上流部左岸の河岸段丘(中位面)の標高155~140m前後に展開する。今回の調査地は、大阪層群で形成された丘陵部と丘陵部の傾斜変換地点にあたる。A地区で163.5~159.5m前後・B地区で196~190.5m前後を測った。

地理的・歴史的環境は『高向遺跡』にまとめられているので省略し、河内長野市関係文化財文獻抄を掲げて周辺の環境を補うこととしたい。尚、中世については以下

【河内長野市文化財文献抄】 紙数の関係で発行・出典を略し、一部割愛したものがある。1990・1 現在

A類 (発表論文・資料紹介)

- ①大正11 岩井敏南 「河内真金塚と箸の長者伝説」『民族と歴史』7-2
- ②大正14 「叢報 天見村から出た弥生式土器」『考古学雑誌』15-10
- ③昭和6 「南河内の大岡山頂で古墳発見—長慶天皇御陵に關係あるか」『歴史地理』57-2
- ④昭和6 富賀鹿藏編『観心寺史要』大日本佛公会
- ⑤昭和18 大脇正一 「天野山金剛寺多宝塔下発見梵文夾絲石による考察」『史通と美術』148
- ⑥昭和23 末永雅雄 「河内金胎山出土と伝へる銅鐸」『近畿古文化の研究』大塚巧芸社
- ⑦昭和23 三浦玄良 「高向村郷土史の研究」
- ⑧昭和29 重光啓作編『河内長野市史』
- ⑨昭和36 中村直勝 「金剛寺小志」大木山天野山金剛寺
- ⑩昭和39 「金剛寺の秘宝」大阪市立博物館展示図録(金剛寺より『天野山金剛寺』再刊)
- ⑪昭和39 中野吉徳編『歸部の星風土記』
- ⑫昭和51 中村善文 「河内長野市高向出土の石製容器—輪宝・木などを収めた特異な1例—」『古代研究』8
- ⑬昭和54 木下昌運 「天野山金剛寺多宝塔の創建と鎮壇結果資料考」『古代研究』18
- ⑭昭和55 南川本司 「千代田南町で採集の石鏡」『摂河泉文化資料』22
- ⑮昭和58 尾上 実 「鳥帽子形八幡神社出土の土器」『中世土器研究』26
- ⑯昭和60 尾上 実 「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器論—」『中世土器の基礎研究』1
- ⑰昭和62 尾谷晋彦 「韓式系土器出土遺跡の概要 33.三日市遺跡」『韓式系土器研究』1

B a類 (大阪府発行)

- ①昭和2 「大阪府史蹟名勝天然記念物」第1冊(南河内)大阪府内務部学務課
- ②昭和5 池田谷久吉「今回発見された跡ある観心寺の鬼瓦に就て」『大阪府の史跡と名勝』4 史蹟名勝天然記念物保存協会編 学務部社寺兵事課
- ③昭和7 岩崎劍心 「天野山の宝剣と「劍成説法」との関係」『大阪府の史跡と名勝』7
- ④昭和7 梅原末治 「大阪府下に於ける主要古墳墓の調査1」大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第三輯
- ⑤昭和8 末永雅雄 「河内金胎山出土と伝へる銅鐸に就いて」『大阪府の史跡と名勝』9
- ⑥昭和8 岸本幸二 「南河内郡天見村八幡神社の文書」『大阪府の史跡と名勝』9
- ⑦昭和9 魚澄惣五郎「金剛寺摩崖の秘抄の墨書に就いて」『大阪府の史跡と名勝』10
- ⑧昭和10 魚澄惣五郎・岸本幸二・木村武夫「天野行宮金剛寺古記」大阪府史名天報告第六輯
- ⑨昭和12 「一、指定 観心寺境内・金剛寺境内」『大阪府の史蹟と名勝』昭和17に改訂版
- ⑩昭和13 魚澄惣五郎「金剛寺所蔵延喜式神名帳の調査」大阪府史名天報告第八輯
- ⑪昭和13 木村武夫 「大阪府下に於ける後村上天皇の御聖蹟」大阪府史名天報告第九輯

B b類 (大阪府並びに大阪府教育委員会発行)

- ⑫昭和24 「附録塔婆下の埋藏物に関する発掘経過概要」『天野山金剛寺国宝塔婆並鐘樓修理工事報告書』府教委
- ⑬昭和26 「重要文化財長野神社本殿修理報告書」府教委
- ⑭昭和37 藤澤一夫 「大岡山古墳の調査」『大阪府の文化財』府教委
- ⑮昭和41 「重要文化財鳥帽子形八幡神社本殿修理報告書」修理委員会

- ⑬昭和48 中村 浩ほか「甕子瓦遺跡発掘調査概要—河内長野市柳町東所—in」『大阪府文化財調査概要1972』
- ⑭昭和56 「長野神社所蔵遺物」『大阪府神社文化財図録』大阪府神社庁
- ⑮昭和57 大野 薫ほか「石仏遺跡発掘調査概要—河内長野市石仏所在—in」『大阪府文化財調査概要』
- ⑯昭和58 山本 彰ほか『栗山遺跡—河内長野市清見台用地内—in』府教委
- ⑰昭和52～大阪府史編集専門委員会編『大阪府史』第一巻古代編・第三巻中世編1・第四巻中世編2・第五巻近世編1・第六巻近世編2・第七巻近世編3
- C a 類 (財) 大阪文化財センター発行)
- ⑱昭和48 中西繪人・奥井智秀『主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス(大阪外環状線)予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』センター調査報告Ⅱ
- ⑲昭和49 「三日市地区特定土地地区画整理事業施行地区内片断遺跡第1次発掘調査報告書」センター調査報告
- ⑳昭和60 國榮和雄ほか「河内長野市上原地区画整理事業予定地内分布調査報告書」センター調査報告
- D 類 (河内長野市並びに河内長野市教育委員会発行)
- ㉑昭和29 『川上村史』川上村役場
- ㉒昭和46 峯 正明ほか「大畑山古墳・大畑山遺跡発掘調査概要」『河内長野市文化財調査概要』
- ㉓昭和46 峯 正明 「長池宮跡発掘調査概要—河内長野市小山田地区—in」『河内長野市文化財調査概要』
- ㉔昭和51 中村善文・峯 正明「藤原宮跡発掘調査概要—河内長野市上原町所在—in」『河内長野市文化財調査概要』
- ㉕昭和58 『河内長野を歩く(改訂版)』河内長野市文化財ガイドブック 市教委
- ㉖昭和61 加藤博章・尾谷雅彦ほか『上原遺跡試掘調査報告書』市教委
- ㉗昭和61 尾谷雅彦・龜山 隆「三日市遺跡調査報告書—岩湧き壺掘造成に伴う調査—in」市教委
- ㉘昭和52～河内長野市文化財調査報告書
- 第1輯『河内滝畑の民家』1977・第2輯『小深・石見川の民家』1979・第3輯『天見・流谷の民家』1980・第4輯『加賀田の民家』1981・第5輯『河内長野の絵馬』1981・第6輯『河内滝畑の美術工芸』1981
- ㉙昭和62 尾谷雅彦・峯 正明ほか『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』(麴所藩陣屋・長野神社・鳥帽子形城) 市文化財報告書第11輯
- ㉚昭和63 尾谷雅彦・中村善美『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(高向南・高向神社・日野観音寺・尾崎) 市文化財報告書第14輯
- ㉛平成1 尾谷雅彦 『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(加塩・長池原) 市文化財報告書第16輯
- ㉜昭和47～市史編纂委員会編『河内長野市史』第四巻史料編1 1972・第五巻2 1975・第六巻3 1977・第七巻4 1980・第八巻5・第九巻別編1自然・地理・民俗編 1983・第十巻2建築・美術工芸編 1973
- E 類 (調査会発行)
- ㉝昭和50 兼康保明・峯 正明ほか「天野山金剛寺中世墓地発掘調査—河内長野市天野町所在—in」金剛寺坊跡調査会
- ㉞昭和52 『河内長野大畑山—大畑山古墳・大畑山遺跡発掘調査報告—in』関西大学文学部考古学研究所報告第5冊
- ㉟昭和60 尾谷雅彦ほか「三日市遺跡調査概要Ⅰ」三日市遺跡調査会
- ㊱昭和61 尾谷雅彦・加藤博章ほか「三日市遺跡調査概要Ⅱ」三日市遺跡調査会
- ㊲昭和63 尾谷雅彦・四宮加智子ほか「大阪府河内長野市 三日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ」(縄文—古墳時代編)
- ㊳昭和63 尾谷雅彦ほか「大阪府河内長野市 三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ」(奈良—近世編)

第三章 調査の結果

第1節 A地区の調査 (第3～5図・図版一～五・一～一二)

調査地は、水路・里道を挟んで高向遺跡(その3)工区G区の南に接する。現状は、畑地と水田・果樹園(蜜柑)の荒地であった。調査面積520m²で、人力掘削の総土量は364m³、総て人力小運搬によった。

建物跡などの遺構は検出されなかったが、蜜柑畑造成以前の9枚の折り重なる水田層が観察された。これらの水田造成時期、並びに旧地形を把握することができた。G区側よりなだらかな斜面が3-OZの石垣から急激に上がる丘陵地形となっている。

a層序 (第4図、図版四・五)

現標高はT.P.+163.2～159.0mを測る。G区南端との比高差は約1.8mである。1層(蜜柑畑造成に伴う盛り土層)・2層(現水田耕作土と元の耕土・床土層)・3層(近世～近代の旧耕作土層)・4層(耕土以外の自然堆積層)・5層(大阪層群の地山層)に大別される。5層地山は黄橙・灰黄色粘土とその下のシルト質の緑灰色砂層・段丘礫層に分けられる。

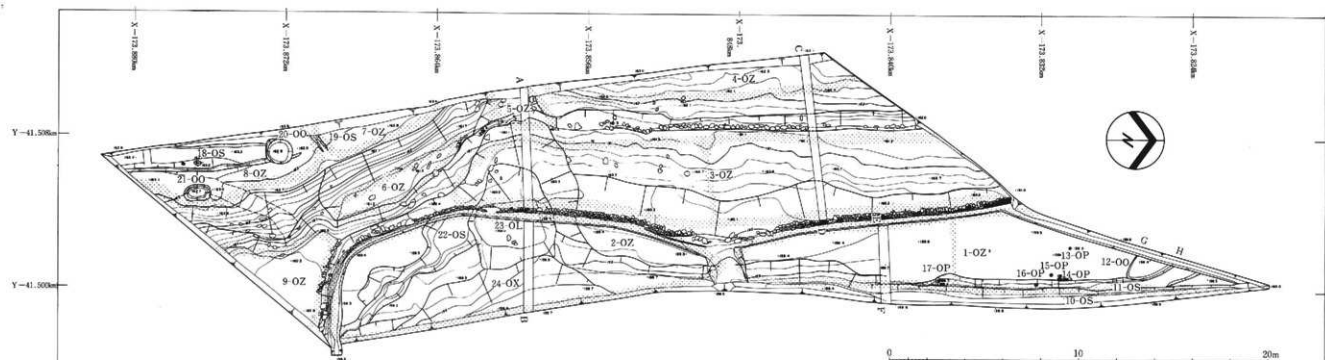
1層(盛り土) 約30～20cmの地山土混じりの浅黄色土を基本とする蜜柑畑の盛土層。株掘り方の新旧の攪乱があった。

2層(元の耕作土) 蜜柑畑造成に伴って全体に削平を受ける。2aはオリブ色・灰黄色砂質土、2bは橙褐色土である。1・2-OZでは30～20cmと地味土は厚い。

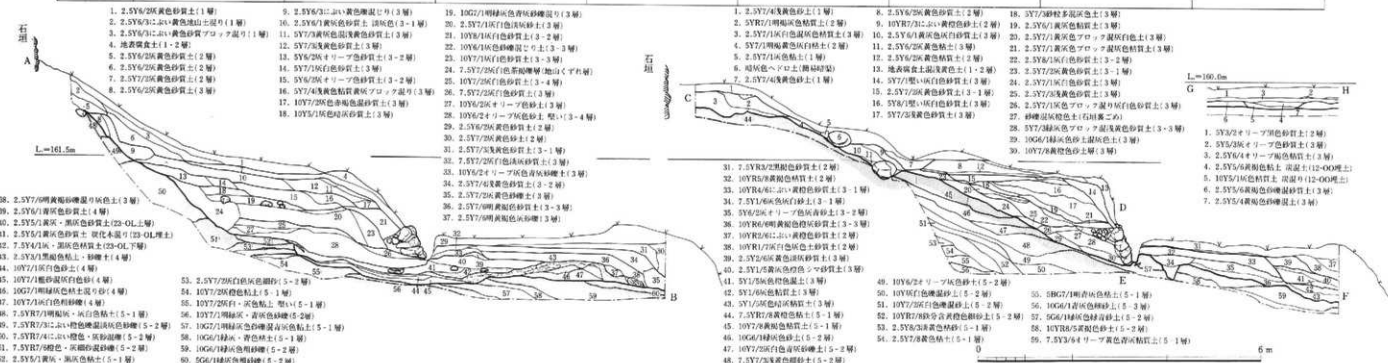
3層(近世～近代耕作土) 3～4枚以上の水田層が認められる。幾度となく繰り返されたは場整備の結果である。灰オリブ色の耕土・間層として粘土質の黄・灰色が入る。盛り土は、地山礫層や青灰色・灰白色の堅く縮まった土である。1・2-OZでは土手の積み土も黄褐色・灰橙色のよく縮まった土で、各時期、外側へ広がっている。

4層(耕土以外の自然堆積層) 24-OXや23-OLの埋土にあたる。シマ状に砂を堆積させる地山土混じりの灰白色砂質土で、全体を覆っている。23-OL埋土の黄灰色砂質土は、中世の遺物を包含していた。さらにその下層の黒灰粘質土・黒灰色砂礫層は、植物遺体と共に瓦器類を包含する。

5層(大阪層群の地山層) 全体は黄橙色・灰黄色の粘質土が覆っている。その下層には淡灰色の砂礫層が堆積する。粘土や礫層の下には、緑灰色や青灰色のシルト質土層が互層



第3图 A地区通構全体図(s:1/200)



第4图 A地区土层断面实测图(s:1/80)

を成しており、沖積状況を示し、土質は非常に硬い。西から東に傾きをもって堆積している。下層はど鉄分をおび、厚さ1mで再び黄色粘土と細砂とが互層を成している。

b 検出遺構 (第3図・図版一～五)

今回、A地区において検出した遺構は、3層・5層に穿たれたものと、3層の水田である。土坑2基・ピット6個・溝4条・落込みと谷状地形・水田面9面がある。中世の遺構以外は総て水田に伴った遺構であった。以下一括して遺構の解説を加える。

1～9-OZ

調査区内で確認できた9枚の水田は、すべて近世から近・現代にかけてのものである。調査区内では3段の離段に造成されていた。1・2-OZは現在も水田の形状をとどめていた。3～9-OZは、地山の成形と石垣・石材の残存状況・土層の観察より復原し得た。6・9-OZの間には8-OZに向かうすりつけが存在したらしい。水田は全容が調査区内で収まらないので広さの推定はできないが、現存する他の水田同様まちまちのようである。

水田の造成時期は大きく3時期に分かれる様で、18世紀半ば以後の造成と考えられる。斜面の為、元来の水田盛り土が厚く、2m以上にも達する。石垣・積み土内から近世・近代陶磁器破片・サヌカイト剝片・瓦器・土師器などが出土した。特に近世・近代陶磁器は6・9・7・8-OZの上層の覆土中から多く出土している。

10-OS

1・2-OZの土手縁辺から当初の造成と思われる近世から現代にかけての溝が検出できる。埋土は、5Y1/5灰色土を基本とする。染め付け腕・キセルなどが出土した。

11-OS・12～17-OP

1-OZで検出した3層から切り込まれた近代の溝と水田耕作時の「スズキ」などのピットである。埋土は灰褐色土を基本とする。12-OPは約1.8mの楕円形を呈し、埋土は10Y5/1灰色粘質土に炭が混じる。深さ0.2m前後。13～17-OPは、径0.2～0.15m前後・深さは0.15m前後と浅い。出土遺物は無い。11-OSは、長さ15.6m以上・幅1m前後・深さは0.1m前後を測り、埋土は褐灰色粘質土。耕作に伴う溝と思われる。奈良時代須恵器・中世土師器・羽釜・瓦器碗・白磁の破片が出土した。

18・19-OS

8-OZで検出した溝で、水田の排水用の溝と思われる。埋土は両者とも灰色砂質土である。18-OSは現存長約10mで調査区外に延びる。幅1.4m前後・深さは約0.1mである。土師器や棧瓦が出土した。19-OSは1m程検出したのみである。幅0.3m、出土遺物はない。

20・21-00

8-0Zで検出された楕円形を呈する土坑。20-00は径約1.4m・深さ約0.4m、21-00は長径約1.4m・短径約0.9m・深さは0.3m前後。埋土は地山土と炭混じりの暗灰色土。中からは、椀瓦とともに近・現代の陶磁器の破片が出土した。一種の廃棄土坑の性格をもつ。

22-0S

2-0Zの南よりで検出した溝である。長さ9.5m・幅2.6~0.3m・深さ約0.3mである。埋土は灰褐色粘質土。地山の黄褐色土を穿つ。底面では灰色がかり、炭が混じる。遺物は検出されなかったが、埋土の状態から判断して、23-0Lに關係する溝の可能性はある。

23-0L

調査区中央部の旧地形の24-0Xに沿って瓦器を包含する落込みを確認した。上半部は、水田造成にあたって削平されており、谷状地形を断ち割った関係で全容を平面で確認できなかったが、復原するとおよそ5m×4.5m・現存の深さは0.5~0.3mを測る。斜面側に大頭大の石が多く存在し、黒褐色粘砂混じり土と良く纏まった灰色粗砂の堆積があり、中世の簡単な水溜の可能性はある。埋土は黒灰色砂質土で、下層には黒色粘土が堆積し、植物遺体を多く含んでいた。炭化材と共に瓦器(椀・皿)・羽釜・須恵器などが出土した。

24-0X

調査区中央部の谷状地形である。水田造成時に完全に埋めていたが、水の流れによってできた鉄分の沈着が多く見られた。元来、この部分は丘陵に向かって谷状になっており、チョロチョロした流れがあったようである。

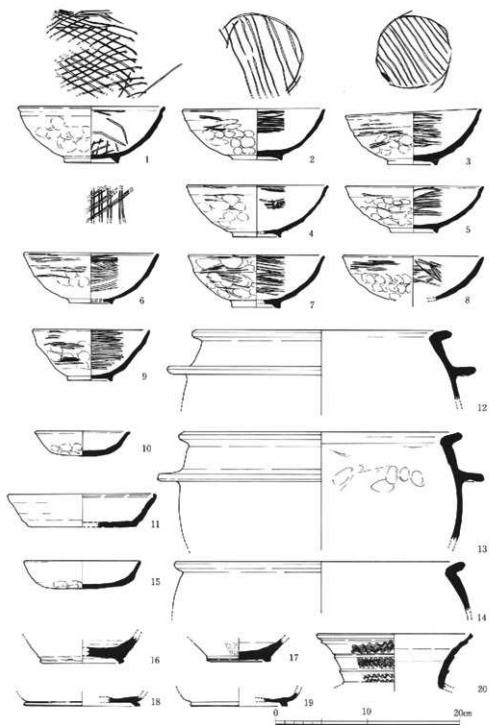
c 出土遺物 (第5図、図版一一・一二)

遺物は、23-0L中の中世土器と8・7-0Z、9・6-0Zの水田客土中の近世~近代の陶磁器類、サヌカイト、古墳・奈良時代の須恵器などの土器片が混在して出土している。遺物収納用コンテナ8箱分で、ローリングを受けているものや細片を含んでいる。

古墳時代の遺物は5世紀後半から6世紀の須恵器杯・壺・甕などで、奈良時代遺物に須恵器杯がある。中世遺物として12世紀後半から13世紀後半にかけての瓦器(椀・皿)・土師器(羽釜・皿)・白磁・須恵器壺などの破片がある。

23-0L

大半が瓦器椀(1~9・24~27)である。接合不可能な高台の破片を単純に数えると117個体あった。尾上編年^(図1)II-2・3型式の特徴を示すもので、12世紀後半~末の年代が与えられる。これらの土器群は、同一遺構内における特徴的一群として捉えることができる。見



第5图 A地区出土遗物实测图(s:1/4)

込み部の暗紋の形状は、斜格子文と平行文とが認められる。斜格子文では格子が雑なもの(26)とそうでないもの(1・6・25・27)の二者がある。平行文でも粗く長いもの(2・4・24)と、やや細かく短いもの(3・5)とがある。量的には、平行文が多い。

外面は、ユビオサエでナデが施され、ヘラミガキは不定方向に雑に施す。口縁部にきついヨコナデを1～2回行うのを特徴とする。口縁端部の沈線は認められない。高台部の形状は「ハ」字形とまだしっかりしているが、雑に張り付けナデを施している。斜格子文の方は高台の径が5.7cm前後、しっかりした造りをしている。平行文をもつ碗の高台径は5.2～4.8cm前後とやや小さく、中心からずれているものが多い。(3)を除き総て図上復原である。歪の大きい(9)以外の口径は、15.8～14.7cmと五寸碗である。器高は6.0～5.5cmを測る。全体的に炭素の付着は良いが、底部内外面には付着していないもの(6・25)がある。

その他に瓦器皿と五寸の杯がある。(10)は三寸の小皿であり、風化が進んでいる。しっかりとした造りで端部にはナデを施す。杯(11)は内面には炭素が付着せず灰白色を呈しているが、重ね焼きの為外面端部に幅1cmで炭素が付着している。調整は内外面ともナデによるが、内面端部にかえり・外面に強いヨコナデを施す。底部はヘラキリである。^(註2)

羽釜(12～14)は、復原口径29.5～27.6cm前後を測る。色調・風化を異にするが同一個体の破片であろう。内外面とも浅黄色から灰白色である。鈔より下半にはススが付着している。その他に、須恵器壺底部の破片(17)がある。内外面ともヨコナデによる。

混入遺物としてシャープな造りの古墳時代須恵器壺口縁部(20)や壺体部・奈良時代須恵器杯底部(18)の破片がある。

水田盛り土(2-OZ)

23-OIを覆う上層から、少量の瓦器碗破片が出土した。(23)は底部、(22)は口縁部から底部の破片である。見込み部は連続圏文と思われ、ヒモ状の高台が張り付けてある。尾上編年Ⅲ-3と13世紀後半に比定される。

その他に土師器皿(15)がある。口径12.7cm・器高3.0cmを測る。内外面ともナデによるが、外面底部には指頭圧痕を残す。外面端部に鋭いヨコナデを施すのを特徴とする。

水田盛り土(1-OZ)

1-OZの盛り土からも少量の土器が出土したが、大半是水田を構成したと思われる11・10-O Sからである。11-O Sからは、奈良時代須恵器杯身片(19)に混じり、白磁底部(17)が出土した。白磁は、猫書きのある玉縁の鉢と思われ、内面に釉が観察できる。10-O Sからは近世後期の仏飯器脚部(46)やキセル(51)が出土した。(46)は、外面には釉がか

かるが、接地面は無軸である。(51)は、雁首・吹口すべて銅板を折り曲げタタキ出して造っている。(35)は近世の椀である。無地で内外面とも軸を施す。

水田盛り土(3・6・9-OZ)

3-OZの盛り土上層からサヌカイト(21)が出土した。裏に自然面を残す大形の剥片で、風化の状態から縄紋時代に比定できる。その他の遺物に、3-OZ南半、6・9-OZの盛り土から出土した近世から近代にかけての陶磁器類がある。代表的なものを挙げる。

(30)は椀の破片。内外面に青の染め付けがある。(31)は(30)と同じ図柄の皿の破片である。(32)は唐津と思われる椀底部の破片。内面に重ね焼きの跡を残す。(33)方筒形の香の壺であろうか。外面に牡丹の花の染め付けがある。(34)は内面に青色の染め付けがある皿の破片で口縁が反外する。(36)は内外面アメ軸を施す椀の底部である。(37)は内面が貝殻状の皿の破片。(38)は無類の鉢の破片。緑灰釉を施す。(39)はツマミの付く落し蓋である。上面に釉を施し、内はケズリのままで、ススが被り黒ずんでいる。

(41)は焼きの硬い備前の摺鉢の破片である。口縁端部の山形・沈線・摺目も鋭い。(44)は、瓦質の炬燵・七輪かと思われるもので円形・方形の透かしがある。方筒状になると思われる。(45)吉兆札の一種であろう。先端部に「文」の押し文・穿孔がある。左右「寶」の字を配し、その下には打ち出の小龍や七福神のような顔が見える。(47)は賢美な土師質の摺鉢で、外面はケズリの後ナデ、内面は刷毛目調整の後櫛状工具により摺目を施す。内面底部は二次焼成を受けている。(50)は外面に青緑の釉を施した小型の仏花器である。

水田盛り土(8-OZ)

8-OZの西よりの覆土・18-OS・20・21-OOから、棧瓦とともに近現代の陶磁器が出土した。代表的なものを挙げる。18-OSの(48)は土師質で高台の付く火消し壺のような無類のものである。内面はナデ、外面はミガキが施されている。(28)は小型の椀で、菊花のスタンプ文がある。(29)は白磁小杯で内面に描かれた蓮花の縁どりを残す。(40)は底部糸切りの壺の破片で、内面に漆が付着する。(42)は土師質の焙烙の口縁部破片。口縁部外面にススが付着している。(43)は、外面が黒色研磨された瓦質の丸火舎底面部の破片。(49)は備前焼の種壺の破片で、口縁は扁平な玉縁状を呈する。

註

- (1) 尾上 実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』古文化論叢刊行会 1983 「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器椀—」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985
- (2) (11)の坏については、協会諸兄より神出系の須恵質土器・奈良時代の輸入不良品との意見をも得た。いづれにしても在地では類例を見出し難いタイプの土器である。

第2節 B地区の調査 (第6・7図)

B地区は、日野方向から張り出す丘陵である。丘陵は独立した支脈を形成し、頂部は平坦面を成す。大半は、近年まで果樹園・畑地として利用されてきた。調査段階では竹林が広がり荒地と化していた。今回の調査対象地は、工事予定地で延長約500m、幅約70～50m・面積約30000㎡以上の範囲をもつ。急斜面・谷等を除外した丘陵平坦部から傾斜変換面に、大阪府教育委員会指導の2mトレンチを地形に即して設定した。さらにそれに直交したものを斜面部にまで設けた。結果的に長短24箇所、総延長700mの1404㎡で人力による掘削土量は483㎡に達した。トレンチ配置状況は、(第6図)に示す。その結果、耕作に伴った遺構以外、何等の遺構・遺物は確認できなかった。以下、トレンチの概略を示す。

№1・23トレンチ

蜜柑畑の尾根筋に設定。1Tr.50m、23Tr.14m。標高は、191.6～190.8m。地表土下は、薄い間層を挟んで、地山の段丘礫層が検出される。南の地山は黄褐色粘土に変化する。蜜柑畑の畦溝(東西12条・南北2条・畦幅員4～2.8m・深さ60～50cm)・畑地縁辺を巡る溝(深さ0.8m)と耕作時の浅い落込み以外の遺構は検出されない。遺物の包含はない。

№2・22・21トレンチ

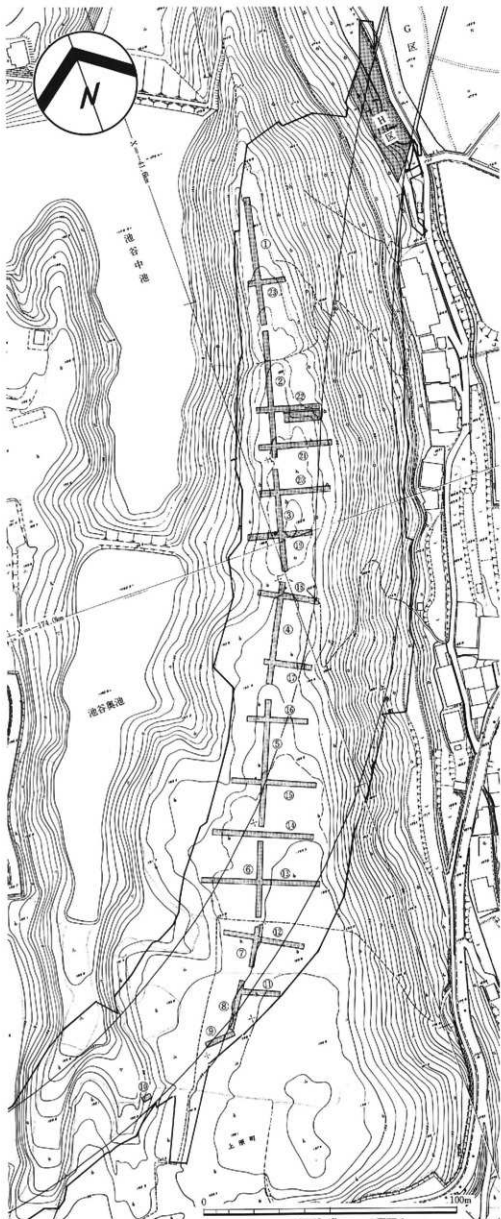
1Tr.につづいて設定。2Tr.50m、22Tr.23m、21Tr.26.5m。22Tr.は、落込みと地山の高まりを追求したので幅4mで南に14m拡張した。標高193.3～191.8m。地表土下は黄灰色の間層を挟んで地山の黄色粘土が検出される。22Tr.の東は赤褐色粘質の地山となる。耕作に伴った石とセメントを使った深さ1.2m程の水溜・野壺・不定攪乱ビット・東西南北の畦溝を確認したのみ。それ以外の遺構・遺物は存在しない。

№3・20・19トレンチ

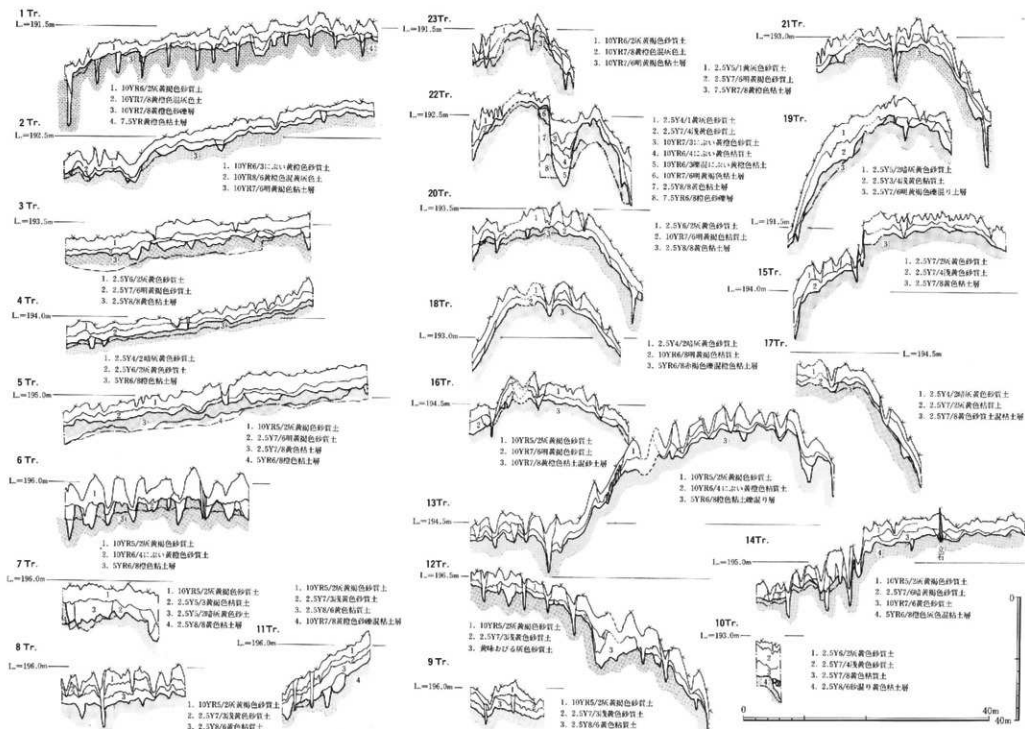
尾根平坦部・斜面に設定。3Tr.40m、20Tr.24.5m、19Tr.25m。標高は、193.7～191.4m。地表土下明黄褐色や浅黄灰色の間層を挟み地山粘土層となる。耕作の不定ビット・南北の畦溝・畑四隅の排水溝があるのみで、遺物の包含はない。

№4・18・17トレンチ

尾根平坦部・斜面に設定。4Tr.40m、18Tr.22m、17Tr.18m。標高は、194.6～192.7m。地表土下に灰色粘質土の間層を挟み地山の粘土となる。耕作の攪乱ビットが10数個と斜面側の落ちが確認されたのみ。遺構・遺物とも存在しない。



第6図 調査地地形とトレンチ配置図(s:1/15,000)



第7図 B地区トレンチ土層断面実測図(縮1/60・横1/600)

№.5・16・15トレンチ

尾根平坦部に設定。総長5Tr.50m、16Tr.24m、15Tr.33m。標高195.5～194.0m。地表下10cmの黄灰褐色の間層を挟んで赤黄褐色の地山粘土層となる。耕作の排水溝・攪乱ピット以外遺構無し。遺物の包含は見られない。

№.14トレンチ

尾根方向に直交して設定。総長44m。標高196.3～194.6m。地表下10cm程度の灰黄色砂質土を咬む。南北の果樹畦溝・攪乱ピットの他に礫が入る1条の東西暗渠あり。土地の境界を示す河原石の建石があった。遺物の包含はない。

№.6・13トレンチ

尾根平坦部に設定。6Tr.30m、13Tr.57m。標高196.3～194.4m。地表土下に赤黄色粘質土・黄色砂礫土の地山が露呈する所と間に淡灰色砂土を挟む所がある。果樹畑の畦溝・攪乱ピット以外遺構はなく出土遺物もない。

№.7・12トレンチ

尾根平坦部に設定。7Tr.16m、12Tr.36m。標高196.5～194.0m。地表土下10cmの灰色砂質土を挟む。南北の果樹畑の畦溝8条と攪乱ピット・中央部に暗灰黄色砂土の径6m程の落込みを確認。遺物の包含はない。

№.8・11・9トレンチ

尾根平坦部に設定。8Tr.20m、11Tr.15m、9Tr.12m。標高196.2～195.2m。地表土下は、灰色・黄色の砂質土を挟む。果樹畑の畦溝痕跡と20数個の攪乱不定ピットを認めたのみ。遺構・遺物はない。

№.10トレンチ

里道を下がった蜜柑畑斜面に設定。延長4m。標高192.9～192.4m。地表土下は盛り土の浅灰色砂質土・灰黄色粘質土で地山礫層となる。斜面の為、谷方向に落ちる。遺構・遺物なし。

【上原地区地籍】

1～10番	ヒノサカイ	11～12番	エックワ	13～50番	ニケンヤ	51～55番	イケサカ
56～62番	イケダニ	63～116番	ヒロノ	117～155番	ヒロノタニ	156～232番	イケダニナカジマ
233～248番	クルマサカ	249～272番	車坂	273～306番	ミゾオチ	307～310番	ハナダ
311～314番	ミツマツ	315～324番	ナヨド	325～331番	ヤマシタ	332～335番	ミゾヲチヤマウエ
336～338番	タナバラ	339番	チヨゲン	340～350番	イケダ	351～367番	イケクビ
368～391番	イマイケ						

原石の石垣は、その構築・仕様の違いから少なくとも3度以上の積み換えが観察される。丘陵斜面にへばり付いて設けられた水田は、地元で「百田^{ひゃくだ}」と総称して呼んでいた。

水路と「百田」とは無関係ではない。丘陵中腹を日野から水落を經由して今池に注ぐ「上^{うか}原水路」が現存するが、宇水落で井堰が切り替えられ「今池^{いまいけ}」まで配水し、高向地内一円を灌漑していたものである。水落で切り替える水路は、小山田・千代田・木戸の共有の「寺^{てら}がけケ池水路」と呼ばれ、寺ケ池まで配水している。現在は、「上原水路」とそれに平行して走る「今池水路」とがA地区の南東隅の水門で丹保池^{たんぼいけ}に注ぎ北流するが、これは一種のバイパスと考えられ後造のものであろう。現在も年中豊富な流れを保つ上原水路の形成時期は、離段に造成された水田と違わない時期であろう。

2、調査区内が連面と耕作地として利用されていたことは先述したが、検出した杭・溝などの遺構は、総てこれらに伴ったものと判断できる。造成にあたっては大規模に整地を行い、盛土・耕作土の各層には古墳時代・奈良時代・中世・近世の遺物が混入している。弥生時代・平安時代中葉～鎌倉時代集落の存在が明かになってきているが、周辺部に奈良時代の遺構が存在した可能性も考えられる。F区で多く検出された縄紋時代遺物が調査地に及んでいないので、元来の集落跡は他に求めなければならないだろう。

3、7・8、6・9-OZや土坑・溝から棧瓦に混って近世・近代の遺物を検出した。古老の話や地籍の「ニケンヤ」が示す通り、明治期まで調査区の南に人家が存在していたらしい。

4、近世以前は、3・4-OZから上は急激に斜面になっていて、粘土と微砂・細砂が斜に堆積していた。中央部は、浅い谷状の地形24-OXとなっており、23-O Lの落込みが形成されていた。落込みは一種の溜池(水溜)と思われ、調査区から東のグライ化された谷状地形は中世期に水田として利用されていた可能性がある。

5、B地区(丘陵尾根部)においては、現代の耕作に伴ったもの以外の遺構・遺物は何ら発見されなかった。遺跡の範囲の南限は丘陵傾斜変換付近までと思われ、丘陵には集落・生産地などの空間は全く及んでいなかったと判断される。

6、高向遺跡の各時代の動向はなお不明である。縄紋前期の石器工作場の解釈、小規模な弥生・古墳時代集落・中世前期集落の構造や性格など解明されなければならない問題点も多い。今後、これら遺跡の調査成果に基づいた研究の進展と高向遺跡の地道な調査の蓄積に伴い、遺跡の範囲の確認・性格・実態の解明・歴史的位置づけなど問題点が多岐に展開されることを期待したい。参考までに調査地周辺の地籍を19pに掲げておく。

(19900131稿)

